

あるテレビの放送から

何年か前テレビの放送を聞いて感銘を受けたことがある。

病の床に伏している妻が夫に「私は何処かに生まれ変わって居るからきつと探してね」と苦しい息の下から言った。



その妻はよき夫にかしずき愛し愛され共に信じあい、幸せに生きて来たのだろう、胸がジーンと締め付けられる思いがしてならなかった。

そして、この自分はとうだったろうと思わざるを得ない、この年まで一生懸命自分なりに働いてはきたが、はたして人間的に恥すかしくない私だったろうか、妻に慕われる夫だったのだろうか。人間の死後、肉体はこの世から消え去る運命だが、魂は消えないのでは無いのか。

魂や、心、人格が永遠に受け継がれ、前世のことは何もかも消え去り新しい心身となりこの世に生まれ変わって、又母の乳を飲み可愛がられ、幼稚園から小学校、中学校、高校、そして大学に進む者もあれば、恋をして結婚し、長いようで短い一生を過ごすのだろう。

前世のことは、何一つ覚えが無いのであるから、探すことも、

探されることも、夢物語であるが、その妻の夫に対する思いが、
そう言わせたのだろう。

この人と来世も一緒になりたい、そして又楽しく信じあつた家
庭を築きたい、必ずや探してくれるだろうと思いを残して、旅立
つたのだろう。

二・三年前、妻が買ってきて読んでいたのを一部分読ませて貰
つた本があつた。

その内容は人間の死後の事、来世のことをであつた、
人間は必ず生まれ変わる、わたしもそれを信じて居た、その本
を読んでいると生きている事が素晴らしい、年をとつても楽しく
生きられる、一日一日充実した生活を送ろうと思つたようになった。
仕事で泉区のある家に行った時のことである。休憩時間にその
家の奥さんと世間話をしているうち、人は生まれ変わるだろうか
ということになった。奥さんは必ず生まれ変わると信じていると
言つた。私も信じていると同感し、話しに花が咲いた。話しぶり
からして教養のある四十歳位の人だつた。

全然知らない土地なのに、妙に心が惹かれる時がある、前世は
その近くで暮らして居たのだろうかと考えさせられる。前出の本
には、前世の自分を思い出すことが出来るアメリカ人が居るとの
話しが載っていた。